

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：55503

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720144

研究課題名(和文)ハーマン・メルヴィルの作品からみる「ひとつではない男らしさ」に関する研究

研究課題名(英文)A Study of "Manhood Which Is Not One" in Herman Melville's Novels

## 研究代表者

高橋 愛 (Takahashi, Ai)

徳山工業高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：90530519

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、「男らしさ」という観点からハーマン・メルヴィルの中・長編小説の分析を行った。具体的には、身体をめぐる問題に焦点を当てながら『ホワイト・ジャケット』(1850)と『白鯨』(1851)を読み、近代アメリカ社会の規範的な「男らしさ」の観念から逸脱するような「男らしさ」が描き込まれていることを示した。さらに、『ベニト・セレノ』(1855)と『ビリー・バッド』(1924)に関する議論では男同士のケアに注目し、その中で「男らしさ」の規範が攪乱される状況が描かれているということを示した。

研究成果の概要(英文)：This study considers how Herman Melville depicts "manhood" in his novels. First, I study White-Jacket (1850) and Moby-Dick (1851) by focusing on the influence of body modification on a man's identity and discuss that Melville depicts "manhood" which deviates from the then normative manhood. Then, I examine Benito Cereno (1855) and Billy Budd, Sailor (1924) focusing on care between men and discuss that these novels indicate male care could be subversive of the social norms on "manhood."

研究分野：米文学

キーワード：米文学 ジェンダー セクシュアリティ

## 1. 研究開始当初の背景

ハーマン・メルヴィル(Herman Melville)の長編小説の大半は捕鯨船などの男だけの世界を舞台とし、その中で男同士の濃密な関係が描き込まれている。メルヴィル研究において性をめぐる問題が大々的に議論されることはなかったものの、作品研究においては登場人物のホモセクシュアリティが指摘されることがあり、また、伝記においてメルヴィルに同性愛的傾向があった可能性について言及されることもあった。1980年代後半以降、ジェンダー研究やクィア理論が隆盛していくなかで、『クローゼットの認識論(*Epistemology of the Closet*)』(1990)でイヴ・コゾフスキー・セジウィック(Eve Kosofsky Sedgwick)が行った『ビリー・バッド』に関する議論(『ビリー・バッド』——ホモセクシュアルのいなくなった後で)、ロバート・K・マーティン(Robert K. Martin)の『英雄、船長、他者(*Hero, Captain, and the Stranger*)』(1986)、ジェイムズ・クリーチ(James Creech)の『クローゼット・ライティング/ゲイ・リーディング(*Closet Writing / Gay Reading*)』(1993)など、おもに男のセクシュアリティの問題に焦点を当てた研究が発表されるようになった。ジェンダーの点では、エリザベス・シュルツ(Elizabeth Schultz)とハスケル・スプリングァー(Haskell Springer)の編集による『メルヴィルと女たち(*Melville and Women*)』(2006)のように、メルヴィル文学では存在を抹消ないしは軽視されていると考えられてきた女の問題に注目した研究も出てきている。しかし、男のジェンダー、とりわけ、ジェンダーに基づく男のアイデンティティをめぐる問題は、「アメリカン・ルネサンス」の再考の流れのなかで同時代の作家とともに論じられることはあるものの、メルヴィル研究の分野において問に付されることはほとんどなかった。

近代アメリカ社会における「男らしさ」の概念——例えば、アンソニー・ロタンド(Anthony Rotundo)が『アメリカ的男性性(*American Manhood*)』(1993)の中で「独立独行の男らしさ(*self-made manhood*)」と呼んだもの——を踏まえながらメルヴィルの作品を読むと、第一作目の『タイピー(*Typee*)』(1846)から遺作の『水夫ビリー・バッド(*Billy Budd, Sailor*)』(1924)にいたるまで、その作品には、社会で是認されていたジェンダー規範から逸脱する男の姿が見られる。そのため、先行する研究では論じられることが少なかった男のジェンダーをめぐる問題を複数の作品の分析を通して考察することは、メルヴィル研究の進展に貢献しうるものだと考えられるため、本研究に着手することとなった。

## 2. 研究の目的

本研究では、ハーマン・メルヴィルの小説の分析を通して、近代社会で是認されてきたジェンダー規範に縛られないような男の自己の有り様、リュス・イリガライ(Luce Irigaray)の言葉をもじって言いかえるならば、「ひとつではない男らしさ」と言うべきものの一端を示すことを目的とする。具体的には、身体の損傷や加工をめぐる問題、さらに、男による男に対するケアをめぐる問題を取り上げ、①身体の損傷・加工を通してどのような男としての自己が構築されるのか、②男による男に対するケアを通してどのような男としての自己が構築されるのかという点について考察する。

## 3. 研究の方法

本研究では、年度ごとに到達目標を設定して作品分析を行い、成果発表を重ねることで研究の精度を高めながら研究目標の達成をはかるという方法をとった。

平成24年度は、「身体の損傷・加工を通してどのような男としての自己が構築されるかを『白鯨(*Moby-Dick*)』(1851)等の作品分析を通して明らかにする」ということを到達目標とした。まず、軍艦における笞刑の問題を扱っている『ホワイト・ジャケット(*White Jacket*)』(1850)を取り上げ、語り手による笞刑の批判、さらに、老水夫ウシャント(Ushant)に対する笞刑を中心に分析を行い、身体に加えられる傷が自己の構築にもたらす攪乱的な可能性について考察した。さらに、身体加工が自己の構築にもたらす攪乱的な影響について考察を深めるため、語り手イシュメール(Ishmael)の親友として『白鯨』に登場する銚打ちのクィークエグ(Queequeg)に注目し、彼の身体の有様とその人物像との関係について考察を行った。また、メルヴィルの長編小説の大半が洋上を舞台としていることから、19世紀の航海業に関する知識を深めるため、アメリカ近代捕鯨およびメルヴィル研究に関する資料を多数所蔵するニュー・ベドフォード捕鯨博物館の文書館(アメリカ・マサチューセッツ州)を訪問し、メルヴィル自身が20代前半に平水夫として従事していた19世紀中葉のアメリカ捕鯨業に関する資料の収集を行った。

平成25年度は、「男による男に対するケアを通してどのような男としての自己が構築されるかを『ベニト・セレノ(*Benito Cereno*)』(1855)等の作品の分析を通して明らかにする」ということを到達目標とした。『ベニト・セレノ』を取り上げ、黒人従僕に扮した反乱首謀者のバゴ(Babo)によるスペイン人船長ベニト・セレノ(Benito Cereno)に対する介護の分析を行い、ケアを行うことと受けることが男としての自己の有りに

それぞれどのような影響を及ぼしているのかを考察した。

平成 26 年度は、過年度の計画のうち遂行できなかった点として、『白鯨』におけるエイハブ(Ahab)の身体、すなわち、モービィ・ディックと呼ばれる白鯨による片脚の切断とその後の義足の着用が彼の自己の有り様に与えている影響についての分析、さらに、『水夫ビリー・バッド』において男たちが水夫ビリー(Billy)に行ったケアが彼らの「男らしさ」にどのような影響を及ぼしているのかについて分析を行った。

#### 4. 研究成果

本研究では、ジェンダー、特に「男らしさ」という点から、メルヴィルの中・長編小説のうち『ホワイト・ジャケット』、『白鯨』、『ベニト・セレノ』、『水夫ビリー・バッド』の分析を行った。『ホワイト・ジャケット』と『白鯨』に関する議論では、男の身体をめぐる問題を通して、メルヴィルが近代アメリカ社会が規範としてきた「男らしさ」の観念からは逸脱するような「男らしさ」を作品に描き込んでいるということを示した。『ベニト・セレノ』と『ビリー・バッド』に関する議論では、メルヴィルは既存の規範が攪乱される状況を男同士のケアを通して描いているということを示した。

まず『ホワイト・ジャケット』の分析では、語り手が「人間の尊厳」を傷つける行為として笞刑を痛烈に批判している点に注目し、語り手が言うところの「人間」とは市民、すなわち、成熟した男の謂いであるということを示し、笞刑が批判されるのはそれが「男らしさ」を著しく損なう行為であるからであるということを示した。さらに、笞刑を受けても「男らしさ」が損なわれていない特異な例として老水夫ウシャントに対する笞刑を取り上げ、身体の傷の受け入れは社会の規範に縛られない独自の「男らしさ」を構築していく可能性を秘めた行為であるということを示した。

『白鯨』の分析では、まず語り手のイシュメールの「心の友」でありピークオッド号(the Pequod)の鋸打ちも務めるクィークエグに焦点をあて、彼の身体とその「男らしさ」との関係性の分析を行った。全身を覆う入れ墨——イシュメールとの友情が育まれる際のエピソードやその行動からニュージーランドのマオリを思わせるところもあるが、マオリのものとは断言できないもの——や、アメリカ初代大統領のワシントン想起させるような骨格などの身体的な特徴から、国や民族を超越したとらえどころのない存在になっているということを示した。さらに、第 94 章「手を握る(A Squeeze of the Hand)」で語られる同性愛的な恍惚をイシュメールに覚えさせている点、また、第 78 章「シス

ターンとバケツ(Cistern and Buckets)」で描かれるタシュテゴの救出作業において「産婆」のように振る舞ったとされる点などから、クィークエグはセクシュアリティとジェンダーの点でも領域横断的な存在になっているということを示した。

『白鯨』には、特異な身体を持ちその身体が男としての自己の有り様と分かちがたく結びついているという人物が、クィークエグの他にも登場する。それは、絶対的な船長としてピークオッド号に君臨するエイハブである。エイハブは過去の航海においてモービィ・ディックに片脚を食いちぎられたために鯨骨製の義足を装着しているが、その身体の有り様によって生と死をまたにかける存在となっている。生と死を共存させた身体へと変貌を遂げるなかで正気と狂気を往還して以降、彼は精神においても相反するものを共存させる存在となっている。さらに、19 世紀の捕鯨船員についての歴史研究を踏まえて船長としてのエイハブの言動を精査していくと、メインマストを境にして階級が分断される捕鯨船において高級船員が住まう前檣と平水夫にあてがわれた後檣とを行き来するエイハブは、階級の点でも相反するものを往還している。これらの考察から、片脚を失った「障害者」であるエイハブは、自立を旨とする社会通念に従えば「男らしさ」を欠いている存在となるのであるが、相反するものに同時に身を置くことによって彼独自の「男らしさ」を構築していると言える。

次に「ベニト・セレノ」の分析では、黒人奴隷バボによるスペイン人船長ベニト・セレノに対するケアに焦点を当て、それがケアの当事者のセレノとバボ、さらにその様子を傍観していたアメリカ人船長デラノーの男としての自己像に対して、それぞれどのような影をさしているのかを示した。まず、ケアの受け手となるセレノは、自分で自分をコントロールする力を失って他者に依存することになるため「男らしさ」を失っている一方で、バボによってありもしない「男らしさ」をでっち上げられて男としての自己像を蹂躪されていた。それに対してケアの提供者であるバボは、女性性と結びつけられてきたケア労働に進んで従事することによって自らの「男らしさ」を隠蔽し、デラノーを欺くことに成功している。献身的な従僕を演じるというバボの偽装工作は、彼の「男らしさ」を損なうもののように見えるが、実際には、白人たちには想像すらできなかった彼の卓越した知性、すなわち、彼の「男らしさ」を証明するものとなっている。デラノーについては、心身ともに健康な見舞客としてセレノとは対照的な「男らしい」存在であるかのような印象を与えられている。しかし、「独身男の喜び(Bachelor's Delight)」という彼が指揮する船の名前に目を向け、アメリカにおいて「独身男」がかつてどのような存在とみなされていたのかという点をたどっていくと、浅

薄な観察を続けるデラノーは男としては未熟な存在、つまり、「男らしさ」を欠く存在となっているのである。

最後に『水夫ビリー・バッド』については、広義には男同士の「ケア」ととらえられるもの、すなわち、商船の人権号 (the *Rights-of-Man*) の船員たちがビリーに対しておこなった世話、軍艦ベリポテント号 (H. M. S. *Bellipotent*) の先任衛兵伍長のクラガート (Claggart) がビリーに示した強烈な関心、ベリポテント号の艦長ヴィア (Vere) のビリーに対するアンビヴァレントな態度の分析を行った。まずビリーを母のように世話する人権号の船員たちは、男らしくあるためには排除すべき家庭性 (女性性と結びつけられるもの) を示すことによってジェンダー規範を犯している。クラガートは、ビリーに対する同性愛的な欲望と先任衛兵伍長としての立場、すなわち、軍艦というホモソーシャルな世界の規律の維持のために同性愛的欲望の取り締まりを行う警官としての立場との間で「ホモソーシャル・パニック」を起こしている。そしてヴィアについては、クラガートによる虚偽の告発の審問の場ではビリーに同情を覚えて彼に配慮を見せながら、ビリーによるクラガート殺害を審理する臨時法廷の場では感情を女性的なものとして強く否定することから、ジェンダーのパニックを起こしていると考えられる。これらの分析から、『ビリー・バッド』は男の男に対するケアが近代社会における「男らしさ」の概念を攪乱する可能性を秘めたものとして扱われている作品であると言える。

以上の作品分析から、メルヴィルは、「独立独行の男 (self-made man)」のような19世紀のアメリカで理想とされてきた男性像に対するアンチテーゼと言える男、あるいは、当時の社会では是認されていたジェンダー規範を攪乱するような男を創出していたと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 高橋 愛、クィークェグとは何者か——『白鯨』における不定形の男性像、英文學研究支部統合号、査読有、7巻、2015、229-236

② 高橋 愛、『ホワイト・ジャケット』における身体の傷と男の自己、欧米文化研究、査読有、19巻、2012年、1-16

[学会発表] (計 3 件)

① Ai TAKAHASHI、Is Billy a Peace-maker?: Gender Confusion in *Billy Budd, Sailor*、The 10th International Melville Conference、2015年6月28日(予

定)、慶應義塾大学(東京都)

② 高橋 愛、Herman Melville の *Benito Cereno* における男のケア、日本アメリカ文学会第52回全国大会、2013年10月12日、明治学院大学(東京都)

③ 高橋 愛、クィークェグとその身体の意義、日本英文学会中国四国支部第65回大会、2012年10月27日、高知大学(高知県)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

高橋 愛 (TAKAHASHI, Ai)

徳山工業高等専門学校・一般科目・准教授

研究者番号：90530519